

京機会関西支部第8回京都あそ歩

2025年3月30日(日)

石清水八幡宮と東高野街道をあそ歩

＝仁和寺の法師が見損なった石清水八幡宮山上の本殿参拝と
松花堂弁当の語源となった松花堂庭園で椿鑑賞と松花堂弁当を賞味＝

「仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ、心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、たゞひとり、徒歩よりまうでけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年比思ひつること、果たし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」と言ひける。すこしのことにも、先達はあらまほしき事なり。」『徒然草』第52段(1349年頃)

京阪石清水八幡宮駅→1 石清水八幡宮(①一ノ鳥居→⑤五輪塔・極楽寺跡→②頓宮→③高良神社→④二ノ鳥居→裏参道→⑨南総門→⑩本殿→⑪信長築地堀→⑦石清水井→⑥松花堂跡)→2 西車塚古墳→松花堂庭園(3 東車塚古墳)→バスにて京阪樟葉駅

1. 石清水八幡宮

祭神は、応神天皇、宗像三神(多紀理毘賣命・多岐津比賣命・市寸島姫命)と神功皇后の三座。

貞観元年(859)、南都大安寺の僧・行教が豊前国宇佐八幡宮で八幡大神様の「吾れ都近き男山の峯に移座して国家を鎮護せん」との御託宣を受けて、男山の峯に御神霊を御奉安したのが起源という。朝廷は裏鬼門の守りとして貞観2(860)年に八幡造の社殿を造営した。

天慶2年(939)の承平・天慶の乱(平将門・藤原純友の乱)の折には、朝廷は平定を祈願して成就。以来国家鎮護の社として皇室の崇敬はあつく、天皇の行幸や上皇の御幸は、円融天皇(第64代)の行幸以来、240余度にも及び、伊勢の神宮に次ぐ第2の宗廟とも称された。

河内源氏の源義家は、石清水八幡宮で元服し「八幡太郎」と名乗り、八幡大神は源氏の氏神となる。ちなみに次男・義綱は賀茂明神で元服し「賀茂次郎義綱」、三男・義光は園城寺新羅明神で元服し「新羅三郎義光」。

社殿



石清水八幡宮 本殿



寛永11年（1634）、徳川三代将軍家光の修造。

前後二棟（内殿・外殿）からなる八幡造りの社殿建築様式は稀少であり、松皮葺屋根の軒が接するところに織田信長公寄進の「黄金の樋」が架けられている。（昇殿参拝は2月初旬～12月末 1日2回 有料）

本殿から幣殿・舞殿・楼門と続き、その周囲を約180mの廻廊が囲む。社殿の建造物全てが丹漆塗で、本殿を囲む瑞籬の欄間彫刻をはじめ随所に当時の名工の極彩色彫刻が施された壮麗な社殿であり、平成28年に本社10棟と附棟札3枚が国宝に指定された。北東隅の石垣は、鬼門封じのため角が切り取られている。



東北隅の鬼門封じ

築地堀（信長堀）

織田信長が好んで採用した様式といわれ、瓦と土を重ねることにより、鉄砲の銃撃や耐火性、耐久力に優れていたとされている。

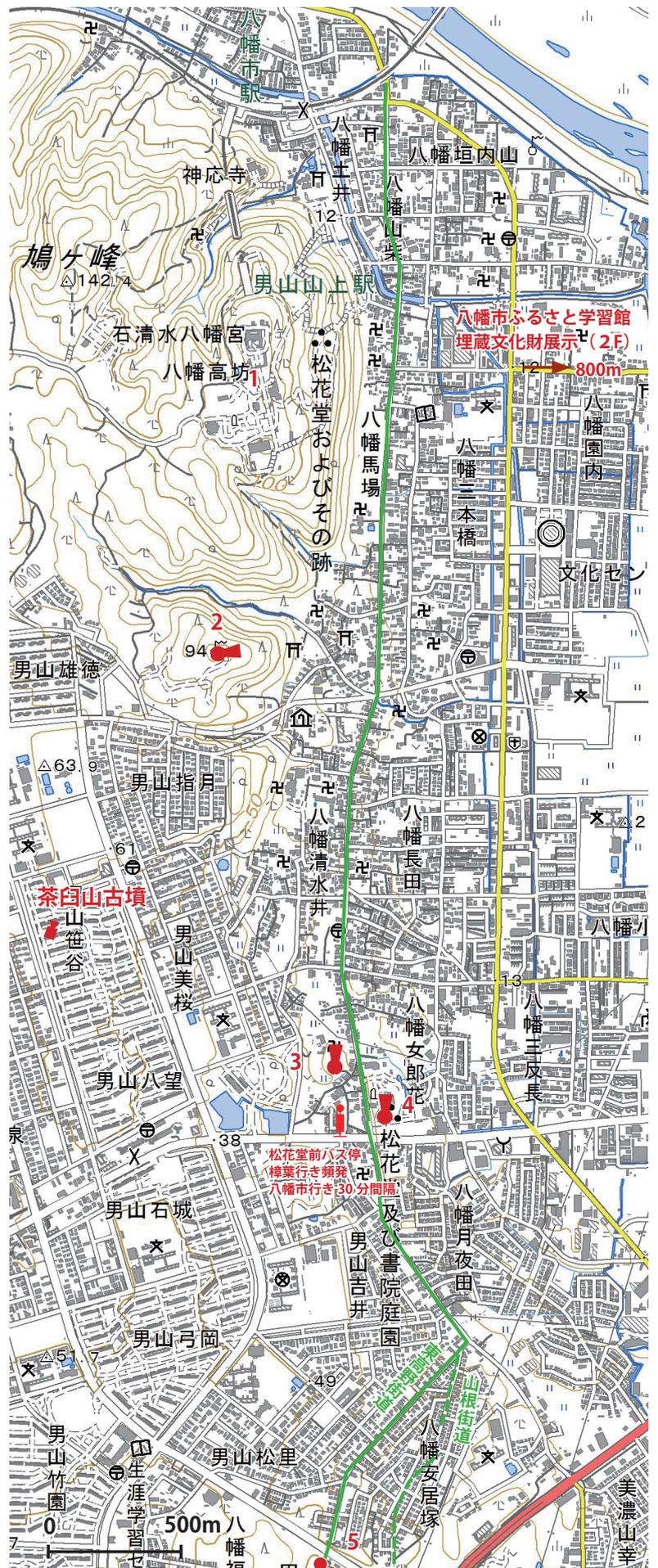


築地堀

松花堂跡

表参道から影清塚の分岐点を右に上がり、石清水社へと向かう途中に江戸時代初期、松花堂昭乗（1584～1639）が営んだ「松花堂」という方丈が建っていた。

松花堂と泉坊の客殿は、明治の「神仏分離」後、山麓の大谷治麿氏に売却され、その後、幾度かの移築を経て、現在の松花堂庭園の位置にある。昭和52年（1977）から八幡市の所有。





松花堂跡



頓宮楼門



極楽寺跡



高良社

東高野街道

西国街道は京都羅城門を起点に桂川を渡り、大山崎から西へ向かう。

大山崎から山崎橋で淀川を渡ると橋本で淀から淀川沿いに大阪へ向かう京街道（東海道）と交わり、生駒西麓を高野山に向かう道は東高野街道と呼ばれる。東高野街道は石清水八幡宮東麓から、洞が峠を越えて、生駒西麓、河内長野で大坂・堺から南下してきた西高野街道と合流し、紀見峠に至る。

平安時代の終わり頃から高野聖（高野山から諸地方に出向き、勧進と呼ばれる募金活動のために勧化、唱導、納骨などを行った僧侶）の活動により、高野山参詣が盛んになり、多くの人が行き交う道となった。

山根街道は八幡で東高野街道から分岐し、長尾・藤阪・津田を通り、茄子作の東方で再び東高野街道に合流する。

エジソン記念碑

八幡の竹を使っての白熱電球の長時間点灯、実用化に成功したエジソンとのゆかりにより、昭和9年境内の隣に「エジソン記念碑」が建立され昭和33(1958)年には現在の位置に移転。

八幡神信仰

八幡神とは何か。豊前の国にあった秦王国で信奉された神、八幡（多数の旗）に降りる神、新羅の神。

石清水八幡宮は宇佐八幡宮から勧請したとされるが、豊前の八幡宮が「宇佐八幡宮」と呼ばれるのは石清水勧請の後といわれ、それまでは「八幡の神」「八幡大神宮」「広幡八幡大神宮」と呼ばれた。

鎌倉時代の『八幡宮宇佐宮御託宣集』には「辛国の城に始めて八流の幡（多数の旗）を天降して吾は日本の神となれり」とあり、日本の神になる前は、辛国（韓国）の神であったと考えられる。

推古天皇16年（608）、聖徳太子が隋に煬帝の国書を送り、裴世清が倭国に派遣された。『隋書』倭人伝には「百済に渡り・・・竹斯（筑紫）国に至り、また東して秦王国に至る。其の人華夏（中国）に同じ。以て夷州（台湾）と為すも、疑うらくは明かにすり能わずなり。また十余国を経て海岸に達す。竹斯国より以東は皆倭に附庸す。」とある。

秦王国は福岡県田川郡香春町付近と言われ、銅や竜骨（石灰岩化石で薬として使われる）が採れた。

秦氏は秦始皇帝の末裔と称し、秦が漢に滅ぼされたあと朝鮮（新羅）に逃げさらに日本に来たと称している。京都嵯峨野に用水路を造り開拓した氏族で養蚕や絹織物、物流を掌握したといわれるが、京都に入る前には、豊前の国に住んでおり、銅鉾山で富を蓄え、香春神社の八幡の神を信奉していた。

『日本書紀』用明天皇2年（587）の条に「用明天皇が病気になり仏教に帰依したいと言った時、物部守屋は反対したが、蘇我馬子が賛成して豊国法師を内裏に入れた。」とある。仏教は、欽明天皇13年（538）にすでに伝来しており、飛鳥には法師がいたはずだが、わざわざ豊国から法師を招いたということは豊国に医術に優れた法師がいたということ。豊前の国には仏教公伝前に呪術を含む新羅仏教が広まっていたと考えられる。

朝鮮では旗の降りる神は太祖（朝鮮建国の伝説の王）と信じられており、降りる天の神（子）と神を降ろす巫（母）がセットになっていた。九州から朝鮮に遠征した神功皇后と応神天皇の母子が新羅伝来の八幡神（太祖）に置き換わったともいわれる。

2. 石不動古墳

男山丘陵の古墳では最北端に位置する。古墳は北側に開析谷が入って独立峰のように見える眺望の良い頂部に築造されている。現在、NTTの電波塔が建設されているため見学することはできない。

墳丘は全長75mの前方後円墳である。後円部径45m、後円部高8m、前方部幅35m、前方部高5mの規模で、主軸を東西にとる。墳丘表面には葺石と円筒埴輪が確認されている。

1943年に偶然に遺物が出土したために応急調査が行われた。埋葬施設は2基の粘土槨で南北に並列している。南槨から銅鏡1点、碧玉製石釧3点、管玉40点、棗玉29点、鉄剣1点、短刀1点、刀子、鉄斧、短甲などが出土した。一方、北槨からは刀剣、玉類、鉄斧、鉄鏃などが出土した。このほか銅鏡、玉類も出土している。築造時期は前期末から中期初頭と考えられる。

茶臼山古墳

石不動古墳から南南西に700m離れた丘陵頂部に位置していたが、宅地開発のために破壊された。1915年に埋葬施設が発掘され、舟形石棺を内蔵した竪穴式石室より石釧、鉄刀、鉄鏃などが出土した。その後1967年に再調査され、全長50mの前方後方墳であることが判明した。墳丘形態は明瞭ではないが、縦長の後方部に細長い前方部が付くと思われる。葺石と埴輪を伴う。竪穴式石室は幅広で、外部に抜ける排水溝が付いている。舟形石棺は断面形が割竹形の古いタイプで、石材が九州産の阿蘇熔結凝灰岩であることは注目される。築造時期は石不動古墳と近接していると考えられる。

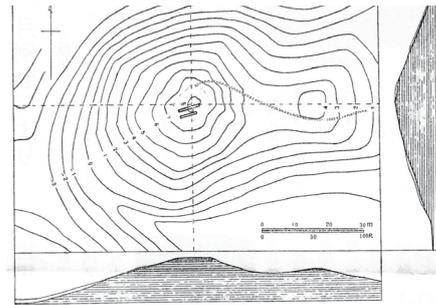
3. 西車塚古墳

東高野街道をはさんで2基の前方後円墳が並列している。街道の西側が西車塚古墳、東側が東車塚古墳で、約150mの間隔をとっている。

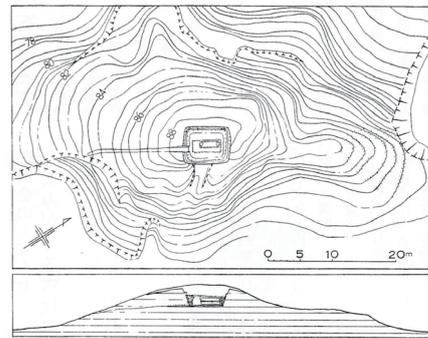
西車塚古墳は丘陵端部を切断して築造されている。全長115m、後円部径70m、前方部幅32mの規模で、前方部に比して後円部が著しく大きいのが特徴である。周囲には盾形周濠の痕跡が認められる。



石不動古墳遠望



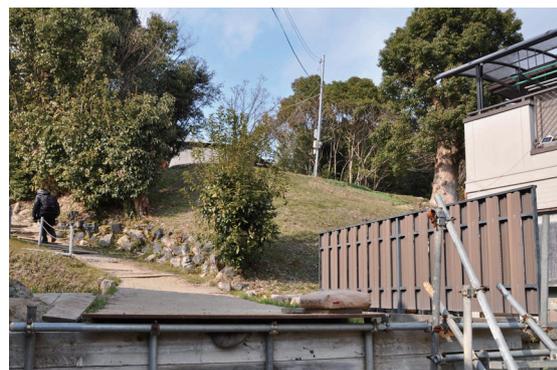
石不動古墳 墳丘図



茶臼山古墳 墳丘図



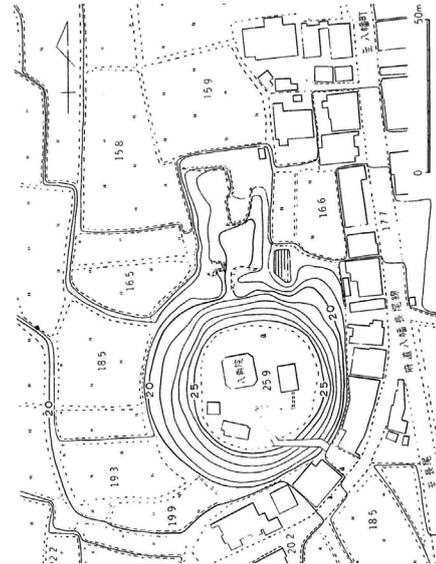
茶臼山古墳石棺 (京大総合博物館東側)



西車塚古墳 後円部

明治35年(1902)に埋葬施設が発掘されている。長さ2.7m、幅0.6m、高さ0.9mの竪穴式石室で、内部より銅鏡5点、車輪石10点、石釧3点、鍬形石2点、石製合子1点、勾玉11点、管玉120点、ガラス玉71点、刀残片などが出土している。銅鏡には三角縁神獸鏡を含み、9面の同範鏡が確認されている。銅鏡の構成は舶載鏡と倣製鏡であるが、碧玉製腕飾類を伴うことから、築造時期は前期中葉ごろと推定される。

後円部頂に建つ八角堂は、もと石清水八幡宮にあった西谷阿弥陀堂で、明治の神仏分離にもなって移設されたものである。乾漆阿弥陀如来座像(重文・鎌倉時代)などを祀っている。



西車塚古墳墳丘図



西車塚古墳 (西から墳丘)



西車塚古墳 (八角堂)

4. 東車塚古墳

平野部に移行した場所に築造されている。現在は松花堂庭園となっており、前方部は削られて後円部を築山に利用されている。墳丘の規模は全長94m、後円部径53m、前方部幅30mに復元される。埋葬施設は後円部と前方部にそれぞれあったようだ。後円部は粘土槨で、銅鏡3点、勾玉2点、素環頭大刀3点、鉄剣、鉄鏃、甲冑、鉄斧などが出土している。前方部は木棺直葬と推定され、銅鏡1点、鉄剣1点が出土している。銅鏡には三角縁神獸鏡、内行花文鏡、龍鏡^だなどがあり、前者には新山古墳などで同範鏡が確認されている。築造時期は西車塚古墳に近接していると推定される。



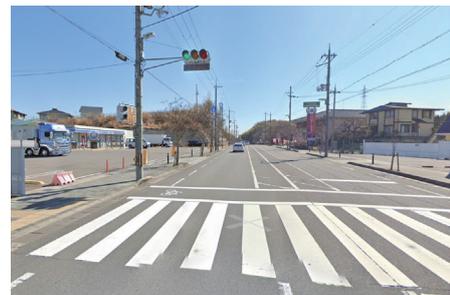
東車塚古墳後円部



庭園に組み込まれた東車塚古墳墳丘

5. 洞ヶ峠

東高野街道が大阪府に越える最高点付近。天正10年(1582)、本能寺の変の直後に織田信長を討った明智光秀の軍と羽柴秀吉の軍が山崎で戦った。明智・羽柴の双方から加勢を依頼された大和の筒井順慶は、一度は明智側に従って山崎の南方にある洞ヶ峠まで兵を進めながらも、最終的にはどちらに付くか日和見をしたとの伝説があった。



洞ヶ峠付近 横断歩道の下が現在の東高野街道
日和見することを「洞ヶ峠」「洞ヶ峠を決め込む」と表現する。史実とは確認されていない。

時期	桂川		木津川		鴨川・宇治川	段階	大王墳の動向
	右岸	左岸	左岸	右岸			
前期	1	五塚原 元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	1	大和
	2	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	2	大和 古市 百舌島
	3	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	3	大和 古市 百舌島
	4	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	4	大和 古市 百舌島
中期	5	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	5	大和 古市 百舌島
	6	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	6	大和 古市 百舌島
	7	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	7	大和 古市 百舌島
後期	8	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	8	大和 古市 百舌島
	9	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	9	大和 古市 百舌島
	10	元福師 寺戸大塚 一本松塚 妙見山 百々池	八幡山 茶臼山 石不動	榎岡車塚 興戸1 興戸2 大住南塚 大住車塚 美濃山王塚	一本松 西山 上大谷 尼塚 梅の子塚1 梅の子塚2	10	大和 古市 百舌島
寺院	山崎院寺 鞍岡院寺 乙訓寺 榎原院寺 宝菩提院寺	志水院寺 美濃山院寺 三山木院寺 里院寺 下泊院寺 興戸院寺 高麗寺	平川院寺 久世院寺 平野院寺 久世院寺	北白川院寺 岡本院寺 法琳院寺 大鳳院寺	北白川院寺 岡本院寺 法琳院寺 大鳳院寺	愛宕 紀伊 宇治	〔凡例〕 ・古墳の規模は相対的に表現した。 ・白文字は地形・規模・階層の少なくともいずれかが不明確な古墳を示す。 ・群集墳と竪穴は省略した。
郡域	乙訓	葛野	相楽	綴喜	久世		

木津川・桂川・鴨川・宇治川流域の古墳

山崎橋

行基は神亀2年(725)に西国街道大山崎かた橋本に至る山崎橋を架けた。橋は、その後いくたびも改修されたようであるが、文献記載をもとにすれば、11世紀には、廃絶したらしく、現在その場所は正確には分からない。

また、付近には相応寺という寺があった。『土佐日記』の承平5年(935)の、前土佐守紀貫之が任地から帰京する際の、山崎付近の記述によれば、山崎橋の近くの川岸にあることがわかる。

離宮八幡宮の境内にある「かしき石」は、その塔心礎であるとも言われるがはっきりとしない。

このように、この付近には多くの古代の遺跡があるが、その後中世になっても大いに繁栄をした場所でもある。



離宮八幡宮内塔心礎 かしき石

(土佐日記)

十一日。雨いささかに降りて、やみぬ。かくてさし上るに、東の方に、山の横ほれるを見て、人に問へば、**八幡の宮**といふ。これを聞いて喜びて、人々拝みたてまつる。

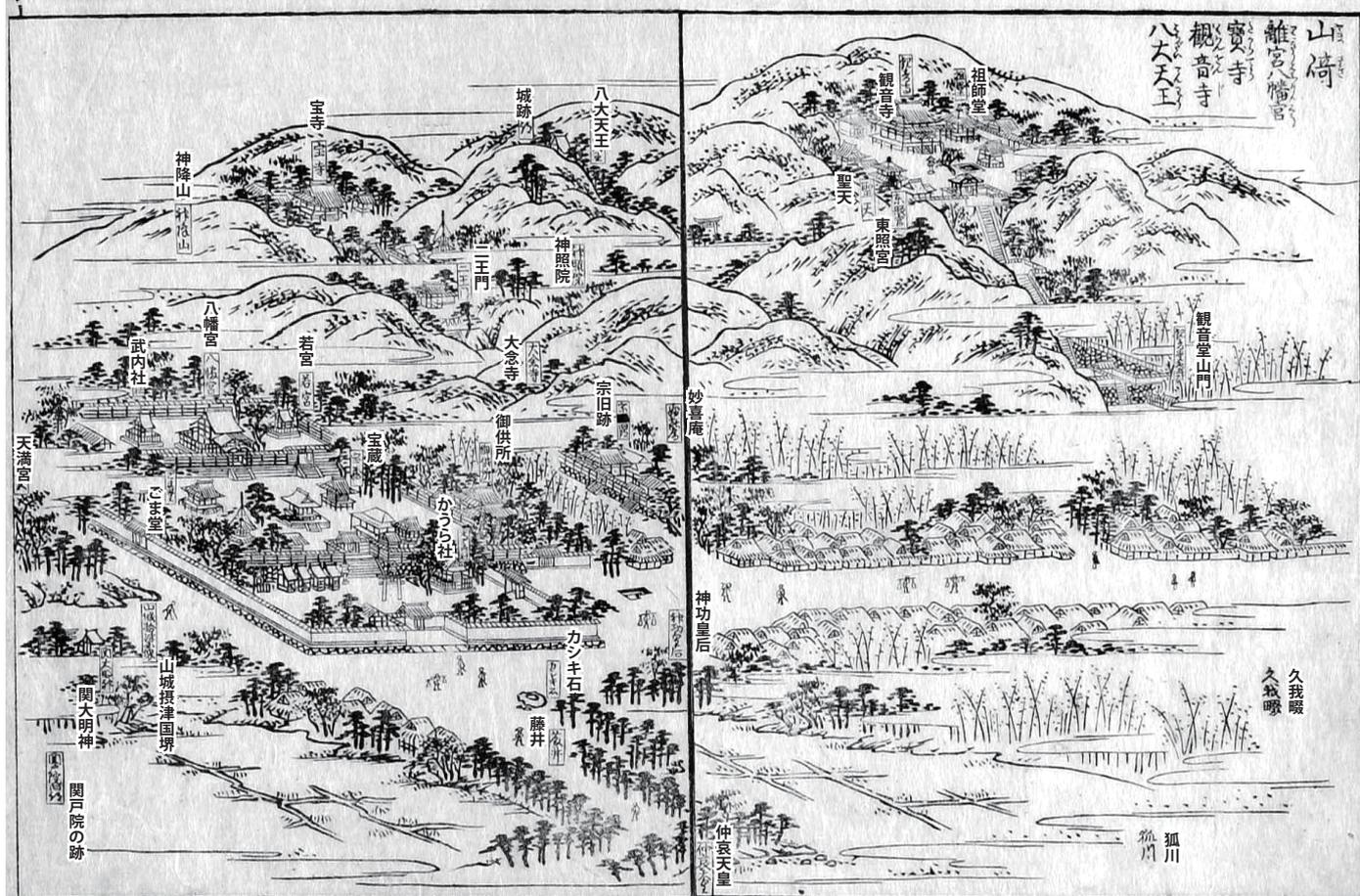
山崎の橋見ゆ。嬉しきこと限りなし。

ここに、相応寺のほとりに、しばし船をとどめて、とかく定むることあり。この寺の岸ほとりに、柳多くあり。ある人、この柳の影の、川の底に映れるを見てよめる歌、

さざれ波寄するあやをば青柳の影の糸して織るかとぞ見る



9～10世紀の山崎津模型



都名所図会 天明6年(1786) 竹原春朝斎(国際日本文化研究センター)

兼好法師

徒然草の作者兼好法師は、鎌倉末期金沢流北条家(横浜市六浦付近が本拠地)につかえ鎌倉幕府滅亡後、木嶋神社の北側、双ヶ岡麓に庵をむすび隠棲したという。

吉田兼好という名で知られるが、これは、100年ほど後の室町時代半ば、吉田神社(京都大学東側吉田山の麓)の神職で唯一神道を創設した卜部(吉田)兼俱が、すでに有名だった兼好を自分の系譜に組み込んだという。兼好は京都北野社(北野天満宮)の神職卜部氏の一族で吉田姓を名乗ったことはないという。

唯一神道：様々な神道を統合した虚無太元尊神を祀る大元宮を吉田神社内に作った。賀茂川に塩俵を沈め、賀茂川の水が塩辛くなったのは天照大神が伊勢神宮から海から賀茂川を上って吉田神社へ来たからだと言った。後にウソがばれた。

北野社：室町時代、京都には300以上の酒蔵が存在したが、酒蔵はまだ麴造りを行っておらず、麴の製造から販売までを担う麴屋が別個に存在していた。北野天満宮は、「麴座」と呼ばれる麴屋の組合を結成し、幕府が認めた独占権を持っており、豊かな財源となっていた。



大元宮(吉田神社内)

石清水の語源

南都大安寺の僧行教が遣唐使としての帰途、大分県宇佐神宮で八幡大神(応神天皇)からのお告げを受け、大同2年(807)大安寺の鎮守として建立された。

手水の水がなかったため、行教が松林の中の磐座を法具で叩いたところ、美しい清水が湧き出し池を作ったので石清水八幡宮と呼ばれたという。石清水の湧き出したとされる井戸は、現在も大安寺の北方御霊神社境内にある。

その後行教和尚は京都の男山に八幡大神(応神天皇)を祀れというご神託を受け、貞観元年(859)京都府八幡市に山城石清水八幡宮(男山八幡宮)が建立された。

行教和尚が改めて宇佐神宮へ出向き男山に八幡大神を招いた説と、大安寺より分神したという二説がある。

天永4年(1113)4月、奈良興福寺が神輿を出して天皇に強訴するおり、男山八幡宮は奈良の大安寺から遷座したのだから共に参加するようと呼びかけたところ、男山の八幡大神は宇佐神宮から直接招いたもので、大安寺とは関係ないと参加しなかった。

大安寺の石清水八幡宮は元石清水八幡宮と呼ばれるようになった。



元石清水八幡宮